

【米子市小体研 領域別授業研究会】

参加者：米子市小体研会員13名

○協議の柱

「する」「見る」「支える」「知る」の見方、考え方について
授業者の意図が感じられる授業展開であったか。

類似の運動（アナロゴン）の活用は有効であったか。

準教科書「わたしたちの体育」の活用がみられたか。



○成果

- ・遅延ソフトを用いての動画を見て確認する子がいた。
⇒客観的に自分の動きを見て、気づきや課題を見出せていた。
- ・本時の「ねらい」に向けて、授業者が子どもの動きの価値づけができていた。
⇒指導者の指示が明確だった。
- ・「キラリタイム」に見つけたコツを意識して「忍者修行タイム」を活動する様子があった。
（フロア）友だちの動きからコツを見つけるともっと意識できたのではないか。
- ・ふり返りで友だちのよいところを見つけている子が多かった。
- ・予備運動で子ども達が生き生きと活動する姿が見られた。
（授業者）単元始めは腕支持が上手くいかなかったが、コツを知り積極的に活動できるようになった。
- ・アナロゴンを楽しみながらすることで、跳び箱遊びの動きにつなげやすくなっていた。
⇒腕支持を意識した動きができていた。
- ・「わたしたちの体育」をもとに設定した場が、活動の意図が分かり易くてよかった。

○課題

- ・子どもが「ねらい」とする動きのイメージがもてていたか。
⇒それぞれの場でも価値づけ（指導言）があるとよかった。
- ・自分の最大限の力を使った活動ではなかったのではないか。
（フロア）困難さを克服することが技能につながる。
⇒子どものやる気に火をつける場の設定が必要ではないか。
⇒力強く踏み切った後に着地する。→オノマトペを活用してポイントを押さえていく。
- ・着地を決めることに忍者らしさを求めるのであれば、ブルーシートで川をつくって落ちないように着地したり、玉入れの玉をまきびしにして踏まないように着地したりしてはどうか。
- ・類似の運動（アナロゴン）に本時の「ねらい」（着地）を意識した動きがあるとよかった。
- ・多くの子がよく動いていて活発に思えるが、1人に着目すると1つの場で2～3回の活動だった。
⇒場の数と人数を考慮する必要がある。